

タイトル：ぼくの大切ないとこ

学校名・学年：関西創価中学校・1年

名前：松村 聡明

(本文)

ぼくには、大好きないところがあります。お母さんの妹、ぼくのおばさんの三人の息子です。一番上のしんちゃんが二十四才、二番目の蓮くんが二十二才、三番目のだあちゃんが十六才、高校一年生です。

ぼくが生まれたときから、いつも一緒にたくさん遊んでくれて、たくさんかわいがってくれます。

ぼくにとって三人は、兄弟のような存在です。三人の中で、一番仲良しなのはだあちゃんです。

大好きなだあちゃんは、小学校から支援学級に通っています。大きな音が苦手なので、支援学級に通っているのよ。とお母さんが教えてくれました。ぼくにも苦手なことはあります。野菜を食べることや水泳などが苦手です。でも、だあちゃんの苦手は好きやきらいではなく、心がとっても苦しくなってしまうそうです。それが、だあちゃんの持っている障害だと聞いて、ぼくはびっくりしました。

そして、障害がある、ないのちがいは何なのだろうと思いました。

だあちゃんは、得意なことがたくさんあります。例えば、動物のことをよく知っています。動物の名前や種類、生息地などにくわしいです。動物園に行くと、一つ一つ動物について説明してくれるので、とっても楽しむことができますし、勉強にもなります。

ぼくが苦手な野菜もモリモリ食べます。泳ぐのも大好きで、この夏も何度もプールに行っていました。とても明るくて、いつもみんなを笑わせてくれます。いやなことも楽しいことに変えることができます。

いつもニコニコ笑っていて、とてもかわいくて、とても優しいです。

ぼくが悔しい思いや、苦しくなったときは、すぐに助けに行くよと、ぼくを元気づけてくれます。ぼくにとってだあちゃんは、最大の理解者であり、大好きで、とても大切な存在です。ぼくも、だあちゃんにとって最大の理解者でありたい、強い味方でありたいと思っています。

なぜなら、ぼくにとって大切な人だからです。ぼくにとって「障害」という言葉は「個性」だと思っています。

生まれた国、顔や性格、得意なこと不得意なこと、好きなこときらいなことが、全て同じな人は一人としていない。ぼくと同じ人間はどこにもいません。

それは、とても貴重で素晴らしいことだから、ぼくのまわりにいる友達のことも大切にしていきたいと思いました。

これからぼくは、障害がある人とは言いません。今までも思ったことはありません。自分

とはちがうところがあっても、それは個性だと思っているからです。

その個性を認め合い、称え合えれば、いじめや差別がなくなっていくんじゃないかと思うのです。

今、フランス・パリではパラリンピックが行われています。世界共通のスポーツを通して、みなが平等であること、だれもが無限の可能性のあることを教えてくれています。勇気と希望を広げてくれている姿に感動します。

ぼくにも、個性とよべるところがあります。生まれた時から頭頂部の毛根が少なく、かみの毛が生えにくいのはげている様に見えます。今までもからかわれた事があったけど、ぼくの証で、個性なんだと思っています。

だからぼくは、見た目で人を決めつけたりしません。これからも、目の前にいるその人のそのままを受け入れる人でありたいと思っています。

そして、優しく心広い人になりたいです。

こう思えるのも、いとこのおかげです。

だあちゃんに、本当にありがとうと伝えたいです。